

みやぎ復興っうしん

GO!GO!
ボランティア

2月号

発行

社会福祉法人 宮城県社会福祉協議会
宮城県災害・被災地社協等復興支援ボランティアセンター
〒980-0011
宮城県仙台市青葉区上杉一丁目2番3号 自治会館2F
TEL: 022-266-3952 FAX: 022-266-3953
URL: <http://msv3151.c-bosai.jp/>



災害ボランティアシンポジウム＆社協フォーラム

2月4日(土)、『復旧に向けた支援活動の今後』をテーマとした災害ボランティアシンポジウム、そして『被災後の支え合い』を切り口とした小地域福祉活動』をテーマ毎に3部会に分かれての社協フォーラムが開催されました。当日は宮城県内の各市町村社協の関係者やボランティア活動を経験した方々など、多数の参加者で賑わいました。

シンポジウム

電力ホールで開催された『災害ボランティアシンポジウム』では4人のシンポジストを招き、災害ボランティア活動支援プロジェクト会議の桑原英文さん(JPCom代表)にコーディネーターとして進行を務めていただきました。

石巻市社会福祉協議会の阿部由紀さんは、平常時の災害に対する準備の大切さ、そして外部支援との連携による意義について発表。今後の復興に向けて地域全体で5年先、10年先を見据えた取り組みの必要性も訴えられました。レスキューストックヤードの浦野愛さんは、支援に入った七ヶ浜町での活動を例に展開。外部支援と社協、行政などの役割分担を明確にできたことで活動が効率化されたこと、また七ヶ浜町が「受援力」を持っているという言葉も印象的でした。

発災後から半数以上の27店舗で営業を継続していたみやぎ生活共同組合。同組合の小澤義春さんからは、震災以降の活動、組合で設置したボランティアセンターが行った支援活動(サロン活

『開会挨拶』 宮城県社会福祉協議会 副会長 佐藤力

今回の震災で宮城県社協が初めて取り組んだのが協働のボランティアセンターの運営。様々な団体にもボランティアセンター運営に関わっていただき、情報や課題を共有しながら活動したことで、有効に機能したと思います。そしてこれからの支援活動が正に正念場。多くの方の力を得ながら、これまでの経験や反省点を肝に命じながら県社協は支援活動を続けていく決意です。皆様もぜひ、今後に役立てていただきたいと思います。

動)も紹介していただきました。女性が多数を占める組合という特徴を活かした取り組みも興味深い内容でした。兵庫県社会福祉協議会の馬場正一さんは、先の3人の話をもとに、社協、NPO、企業それぞれの役割に添った支援、阪神・淡路大震災から17年を経過して見えている課題を頭に入れた上での支援活動の大切さを訴えられました。

後半は桑原さんと各シンポジストが、子どもたちへの支援、民生委員との関わり方、行政の役割、個人情報、仮設住宅支援の課題、介護保険事業の今後など、復興へのキーワードを飛び交わせながらキャッチボール、活発な討論が行われました。

会場の参加者も真剣な眼差しで終始ステージに着目。通常の連絡網や情報交換だけでは伝わらない、大きな情報交換の場になったことと思います。



JPCom
桑原英文さん



石巻社会福祉協議会
阿部由紀さん



レスキューストックヤード
浦野愛さん



みやぎ生活協同組合
小澤義春さん



兵庫県社会福祉協議会
馬場正一さん

社協フォーラム

ベルエア会館で行われた第7回『社協フォーラム』。復興に向けた支援活動について分科会形式で進行しました。

分科会1のテーマは「自治会や町内会などによる小地域福祉活動」。2009年7月、豪雨水害に見舞われた防府市。防府市社協の上田さんは地域の復興に向けて行ってきた活動を紹介。東松島市小野駅前仮設住宅町内会会長の武田さんは奥松島の復興をめざし、目標や計画を立てて活動する地域住民たちを紹介しました。柏崎市社協の大塚さんは新潟県中越沖地震の際に行った町内会などの活動を紹介しつつ、進行役として意見交換の場を設けてくれました。

分科会2のテーマは「サロンなど住民主体の活動のあり方や活性化」。2007年3月、震度6強の能登半島地震発災、輪島市では、その後仮設住宅支援を目的に「災害ボランティアの会」を結成。高齢者を元気づけるために子どもたち自らが結成した「元気もりもり隊」も合わせて輪島市社協の尾坂さんが紹介してくれました。地域福祉に特化した美里町社協の浅野さんからは、サロン活動、福祉を楽しく学ぶために開設した「地域福祉笑学校」についてもお話いただきました。JPCom代表の桑原さんがコーディネート、各地の社協職員、企業職員さんなどに自身が考える地域福祉への豊富や課題なども発表して頂きました。

分科会3のテーマは「民間賃貸借上げ住宅や在宅被災者への支援活動」。北区社協の小原さんには、2000年9月の三宅島噴火により、約5年間全島民が避難生活を強いられた際の活動について紹介。南小泉南地区社協の海老澤さんは、民間借上げ住宅で暮らしている方々に対しての支援活動を紹介しました。レスキューストックヤードの浦野さんが在宅被災者への支援のあり方を提起しつつ、参加者に在宅被災者やみなし仮設住宅で暮らす方々への関わり方を発表する機会も設けてくれました。

各分科会ともにテーマを深く掘り下げ、「時間がもう少しあれば」と思わせるほど充実した内容でした。ぜひ、次回開催の際にもご参加されてみてはいかがでしょうか。

今月の「人」

七ヶ浜町社会福祉協議会
ボランティアリーダー(資材班)
二階堂 修さん

資

材班はボランティア活動を支える、縁の下のような力持ち。活動で使った道具の清掃や整理、貸し出しなどを一手に引き受け、「機械や工具のことで何か困ったことがあれば、まず二階堂さんに」と誰からも頼りにされる存在だ。

七ヶ浜町では避難所がすべて閉鎖された以降も、ローラー作戦による支援ニーズの掘り起こしに力を注いできた。結果、他地域に比べ災害ボランティア活動の実施期間も長期に渡っており、年が明けてからも全国各地からボランティアが集まっている。「震災直後とは全く物資不足で、ボランティアさんには自己完結型の装備をお願いしていました。今は装備や道具も充実したので、身軽にきていただいても活動に参加できますよ。」と話す。

また、七ヶ浜町は三方を海に囲まれた立地的環境から、町の復興に欠かせない

Good Smile!



浜や松林のクリーン作戦を継続して実施している。いまだ流木や立ち枯れた木を処理するチェーンソーや、草の刈払い機の使用頻度も高く、こうした特殊機械の管理やメンテナンスも欠かせない。

「どんなに気をつけていても現場に危険はつきものですから、まずは安全第一。全国各地から来てくれるボランティアさんに対して、できる限り活動しやすく安全な環境を作っていくことが自分の役目」と語る二階堂さん。七ヶ浜に居を構えて約20年。「これからは住民の生活再建に農機具の貸し出しなども必要だと思えますね」と、ふるさとの再生にかける想いは熱い。



分科会1



分科会2



分科会3

被災地の取り組み みやぎ～絆～ smile ☺

南三陸町

町内の死者・行方不明者897人（全人口の5%）、流失・全壊家屋数3,299戸（全戸数の62%）。このふたつの数字が端的に示す通り、地震とその後押し寄せた大津波によって南三陸町は大きな被害を被りました。貴重な命、住まい、財産、仕事、そして故郷で積み重ねてきた多くの思い出。これまで大切にしてきたすべてのものを

流され、なくしてしまった住民の方々は物理的な面だけでなく、心にも大きな傷を負うこととなりました。

被災され我が家を失った方々は、入谷・志津川・歌津・戸倉の町内4か所、横山・南方の町外2か所の仮設住宅を中心に、暮らしの再建に向けた日々を送っています。南三陸町社会福祉協議会では、町行政と協働事業で「被災者生活支援センター」を立ち上げ、被災住民のケア、生活支援を実施。自殺の増加やアルコール依存、孤独死などの問題から被災者を守るべく業務に励んでいます。震災直後の3月26日から活動を続ける災害ボランティアセンターとこの被災者生活支援センターの2本柱で、復興に向けた活動を続けています。

被災者生活支援センターの人員体制は①巡回型支援員93人、②滞在型支援員94人、③訪問型支援員9人（人数は1月4日現在）。①の巡回型支援員は仮設住宅を巡回し、孤独死の予防を図るとともに、それぞれの住民が抱える困りごとや悩みに耳を傾け、その要望を行政や社会福祉協議会などの専門機関へとつなぐ役割を担います。サロン事業の開催も重要な仕事のひとつ。集会所などにおけるサロン事業を通じて、被災者の方が孤独をなるべく感じないようにするとともに、コミュニティ形成に向けた働きかけを行います。

②の滞在型支援員はより細やかなケアを実現するための意欲的な取り組み。仮設住宅内に住まう60歳以上の方が支援員を担当し、同じ仮設内に住むケアが必要な世帯を朝夕の2回巡回します。近所に住む方が見守り役を担うことで、異常やトラブルに速やかに対処できる体制を構築

するとともに、住民同士の交流によるコミュニティ形成のきっかけとしても期待されています。また、支援員の方にとっても外出する機会となると同時に、地域での役割を担うことが生きがいにつながるが期待されています。

③の訪問型支援員が支援する対象は、県外各地へのみなし仮設への転居を余儀なくされた町民の方。1月11日現在で747世帯の方が、町を離れ、県内のみなし住宅で生活をしています。電話や訪問を通じて安否確認や生活相談にのるとともに、遠く離れたふるさととみなし仮設入居者を結ぶ丈夫な糸としての役割が必要とされます。「いまは町外にいる人にも、いつかは住み慣れた南三陸町に戻ってもらいたい」という思いを持ち、日々の活動に取り組んでいます。

いま紹介した各支援員は、まさに被災者生活支援センターの目となり、耳となる非常に大切な存在。今回初めて福祉の仕事に携わるスタッフも多いなかで、より効果的な支援体制が構築できるように、南三陸町社会福祉協議会では宮城県・大阪府・堺市・滋賀県の各社協との連携のもと、各スタッフのスキルアップに向けた各種の研修を実施しています。研修を通じて各支援員がそれぞれのスキルをアップさせることは、これからの生活支援体制を見据えた上で欠かせないものです。そこで、南三陸町社会福祉協議会では、県社協、大阪府・堺市・滋賀県各社協との連携のもと、スタッフのスキルアップに向けた各種の研修を実施しています。

今後、仮設住宅での暮らしが長期化するにつれ、それぞれの被災者が抱える問題もますます複雑化していくことは間違いありません。時が経っても埋まらない大きな喪失感、就職の問題、金銭的な問題、仮設住宅の環境、あるいは将来への漠然とした不安……。画一的な支援体制ではそうした問題をフォローし、求められるサポートを実現することが困難なことは間違いありません。これ以上震災関連の犠牲者を出さないことを目標に、すべての支援員が被災者に寄り添い、それぞれの悩みに真摯に対応していくことが求められています。

生活支援研修会

日時:2012年1月19日(木)

場所:南方サテライト第2集会所(20日 入谷で実施)

プログラム

10時～11時50分

講話「あなたの傍に私がいます」

13時～

「大津市社協の援助職ミーティングの実践」

おわりに

「近江商人の三方よし～売り手よし、買い手よし、世間よし～」

1

月19日に登米市にある南方サテライトで実施された研修には、約45人の支援員が参加。社会福祉協議会・近畿ブロック6人のスタッフが協力し、ときには笑い声が起こる和やかな雰囲気の中で研修が進められました。

最初の講話を担当したのは滋賀県大津市社会福祉協議会の熊澤孝久相談員。滋賀県職員を退職した後、「熊澤こころの相談所」を開設し、来所される方々の悩み相談に親身に接してこられた大ベテランです。ご自身もかつてはヒロポン中毒やアルコール依存症に苦しんだ経験を持つ熊澤さんならではの、「困っている人」「相談を受ける人」それぞれの立場からのお話が続きました。

- その人の意思が尊重される
- その人の持つっている能力が最大限に発揮できる
- 自分ができるとは自分でし、できないことは気兼ねなく援助が受けられる

長年の経験から熊澤さんが感じた「よい福祉」のポイントがこの3つ。ほかにも、「話を聴く」ことが「聞く」になる。「聞いたことは忘れてしまうことが大事」「人の気持ちは簡単には変えられない。コントロールではなくサポーターになる気持ちが必要」など約2時間のお話のなかで、印象的なフレーズが数多く飛び出しました。受講した支援員からも「今後も環境に慣れることなく初心を忘れずに相談にのつていきたい」「この人はこんな人という先入観を持たずに素直に耳を傾け



南三陸町災害ボランティアセンター

住所：本吉郡南三陸町志津川沼田 56（ベイサイドアリーナ駐車場テント）TEL：0226-46-4088



る姿勢を大事にしたい」などの感想が寄せられ、相談員としての心構えをいまいちど再確認する機会となりました。続いて行われたのは、大津市社協で20年近くに渡って続けられている「援助職ミーティング」の実践です。参加者全員が大きな輪を作り、それぞれ自由なテーマで3分のスピーチを行います。ルールは「メモをとらない」「ほかで話さない」「アドバイスをしない」の3つだけと非常にシンプル。それぞれが話す立場となり、また聞く立場となることで「ほかの人に話を聞いてもらうこと」の素晴らしさやありがたさを体験する時間となりました。

最後は、かつての近江商人の経営理念「三方よし」にまつわるお話があり、1日のプログラムは終了。「売り手よし、買い手よし、世間よし」の三方を被災された方あるいは支援員自らに置き換えつつ、それぞれが今後の支援体制のあり方を考える場となったのではないのでしょうか。被災者生活支援センターでは今後もこうした研修を開催し、支援員のスキル&マインドのさらなる向上をはかっていきます。

column

被災地の“いま”を発信し、震災の記憶を風化させないために

震災から間もなく1年を迎えます。テレビや新聞などを通じて全国に向けた被災地情報の発信が続いていますが、震災初期と比較するとだんだんと少なくなっていることが現状です。しかし、多くの被災地でいまだに支援あるいはボランティアの参加が必要であることは疑いありません。震災の記憶を風化させず、多くの人にこれからも関心、関わりを持っていただくために――。各市町村社協・災害VC・生活支援センターのホームページやブログ、twitterなどを通じて、より積極的な情報発信が今後求められてくるのではないのでしょうか。被災地はいまどんな状況で、何が求められているのか。現場の“いま”をできるかぎり多くの人に知ってもらうことが、一步一步の復興を支える大きな助けになってくると信じています。



イベント情報

3.11 東日本大震災・市民とボランティアのつどい

@ 東北大学片平キャンパス・さくらホール

2012年3月11日(日) 13:00～20:00

昨年3月11日に発生した東日本大震災から1年になる、2012年3月11日に、この1年を振り返り、今後のボランティア活動の方向性や指針について議論するために開催いたします。

また多くの県民・市民にも参加してもらい、さまざまな形でさまざまな団体や人と「つながり」を得てもらうことで、参加者一人ひとりにあった形のアクションにつなげてもらう場を提供いたします。

13:00～15:00 震災追悼式 ～阪神・淡路から東日本へ、そして心ひとつに～

場所：さくらホール1階ラウンジ

開会のあいさつ

兵庫県立長田高校音楽部合唱「しあわせ運べるように」他

1.17からのメッセージ

ビデオメッセージ（佐渡裕指揮者など）

14:45:30 黙祷 1分間

「高石ともや」の『神戸から被災地に元気を』の願いを込めて

13:00～18:00 1万のつながりを～311から未来へ～

場所：さくらホール2階大会議室

内容：ボランティア団体や復興活動をしている団体の参加型ブース出展

参加団体：プランジャパン、笑顔311、オトブリッジ、千寿の会、つむぎや

18:00～20:00 市民とボランティアのつどい

場所：さくらホール1階ラウンジ

内容：これまで1年の間活動してくれたボランティアの感謝祭。立食形式でコンサートや意見交換会を実施